

広島俳句倶楽部

令和五年十一月作品集

防府 暁子

防府は古代、周防国の国府が置かれた所で、国衙跡などの遺跡や国分寺、阿弥陀寺等の名刹が現存しています。また、日本最初の天満宮の町としても知られており、江戸時代は毛利家ゆかりの地として栄えました。そして、俳人山頭火の生地でもあります。秋の一日、防府を廻りましたが、事前に歴史などの学習をしておけば良かったと、すこし後悔もしました。

山頭火の墓地に聞きたる昼の虫

岩山へ真つ直ぐに伸び稲の道

秋日和菟蒻供へ地藏堂

草の花ここは周防の国衙跡

秋天に鸞の舞ひたる国分寺

色草を踏んで石風呂覗きをり

御神牛の頭に止まり秋あかね

天満宮の絵馬層なしてつくつくし

紅萩や砂利踏む音の毛利邸

望東尼の歌碑へ素秋の海の風

《作品鑑賞》

あざみ

防府地方は「西の京」と言われるほど名所旧跡が多く、良い所を吟行されたご様子。私も行ったことがありますので、いろいろと思ひ出しました。どの句も、季語の選び方がとてもお上手です。作者の詩心や、表向きのきらきらではなく内に抱えられたお力のすごさに感心しながら読ませて頂きました。

山頭火の墓地に聞きたる昼の虫

山頭火は、魂のふるさとを求めて漂泊の生涯を送られた自由律の俳人。「昼の虫」の季語はさすがだと思いました。

草の花ここは周防の国衙跡

草花に囲まれた静かなたたずまいを句にされていますが、栄えていた頃の昔の人の息吹が伝わってくる様です。

天満宮の絵馬層なしてつくつくし

天満宮は受験の神様として有名であり、絵馬を掲げる親子の姿が目につかびます。

望東尼の歌碑へ素秋の海の風

素秋の風のかかわりが深く、思わず耳をそばだてたくなるような季節の移ろいや、微妙な気配の伝わるとても良い句です。

稔り田に雨の降りだす大路かな

秋茄子を摘ぐ人見つ大路ゆく

岩山も紅葉してゐる大路かな

山萩や眼下に望む大野瀬戸

峠下り蒲の穂絮を吹きにけり

草の実を払うて今日の大路終ふ

柿の木が落ち葉始むる吉備国

藪柑子今年まだ来ぬ鳥のこと

鯉深く沈む日の花芙蓉かな

茶の花にけたたましくて鳥の声

佐保光俊

秋の雲空の画板に描くやう

橋渡る人影映す秋の川

この橋の先は桜の紅葉なり

秋日和誰かが鐘を撞いてをり

金木犀しばし留まる人の居り

舍利塔につづく道なり草紅葉

返り花軒に残れる燕の巢

夜明前落葉踏みゆく二人かな

冬立ちぬ今朝また道を掃いてをり

ジャケットを纏ひ出掛くる車椅子

村上正人

吾が肩のふれて白萩散りにけり

人氣なき庭にこぼれて萩の花

赤まんま緩やかに川曲がりたる

虫の音を朝まだ暗き頃に聞く

ときをりは電車の通る虫の駅

稔り田に峡の朝日の惜しみなく

すぐ雲のいつしかほぐれ秋高し

いとうりの傍通るたび実を数ふ

吾が裾に水引の花ふれてゆく

秋の水一羽の鴨の着水す

高尾ひとみ

裏山の霧晴れて鳥鳴き頻る

屋敷神新酒新米供へけり

すつばさに顔をゆがめる手のレモン

後の月見上ぐ吾が影ながながと

残り蚊をつれて入りし厨口

石路一輪咲き出してゐる門の傍

山峡をゆつくり廻る冬の鶯

茶の花の咲ける山路に歩を進め

山並のくつきり見ゆる霜の朝

玄関は室咲きの花満開に

あざみ

干し物に草の実ひとつ付いてをり

蜘蛛の糸一本づつに秋日差す

少しづつ高きへ飛び秋の蝶

地下道をひとり歩いて秋深し

バス降りて友と別るる秋の暮

学校に沿うて歩ける十三夜

小包で姉の新米届きたり

自分から松茸飯を盛る子かな

うそ寒の後所の椅子に座りたる

うつむける秋薔薇にふと立ち止まる

亜矢

風待つて風船葛の傍に居る

水澄むや君と巡れる鳩の海

駆け抜ける仕事の道や照紅葉

よき肉も添へて出したる今年米

部下に買ふ安産御守秋うらら

車椅子の妻から夫へ秋の蝶

秋の山登る電動車椅子

大本営跡に老翁律の風

病持つ義父のぬくもり後の月

短日や御菜一匙づつ祖父へ

綾乃

大楠や秋澄む伊予の一宮

拝殿に向かふ親子の秋日傘

神木の洞に差し込む秋日かな

爽籟や碩の小石手に取りて

そこそこに鰯が顔出す川面かな

どこまでも落暉へ流れ鰯雲

犬駆くる影のうれしき花野かな

音もなく木の葉の落つる城の址

霜降の空を巡りて日の落つる

鶯の輪を見上げて秋を惜しみけり

井藤希

鹿の声ロープウェイを降りたれば

登高や法螺の音にも迎へられ

いつの間にくぐつてゐたる秋の虹

遠ざかる法螺貝の音水澄みて

杣道に足重くして秋の暮

秋の朝日の出待ちたる小半時

日溜りに靴干しをれば秋蝶来

小春日や一歩づつ行く千光寺

フエリーから色とりどりの耳袋

冬景色重機大地を削りをり

栄吉

芒の穂そよげる道を通ひけり

秋夕日飛行機雲も金色に

杜鵑草少し涼しき庭に咲く

山の端に三日月を見る帰り道

庭の隅枯木に椎茸出でてをり

初紅葉古刹に人の集まりて

仏まで続く小道の紅葉かな

石庭にはらはら落つる紅葉かな

いつのまに山茶花の咲き始めたる

石路の花遍路の行ける道に咲く

大畑恵

西園の大路に沿うて吾亦紅

断崖を打つて季秋の波しづき

峡の日の変はりやすくて該の寒

後の月夜更けて雨となりにけり

庭中に日の届きたる今朝の冬

小六月鯉は撒き餌に寄り来る

綿虫や池の半分日のあたり

低き雲峡にとどまり冬蔵

羅漢像そびらそびらに散紅葉

雲割れてばつと日の差す冬の海

暁子

帰り道フロントガラスに大西日

生家の庭夫と婿との松手入れ

柿齧る登りしその木今は無く

池の鯉背びれに秋日受けてをり

軒下に出入りの秋の蜂を見る

秋耕の父に聞き聞き苗植うる

降りしきる橘の黄葉を見てゐたり

目の前の紅葉の散れる夕まぐれ

冬鳶の糞を食ふ鵜を見てをりぬ

外電作る子らの手悴みて

すみれ

まだ園き蓄の多し菊花展

朝露の道狭まりて山毛櫸林

行く秋や入り日のあたる山毛櫸林

小春日の渡つてみたる太鼓橋

日暮まで公孫樹落葉を拾ひけり

笹鳴の聞こゆる方に日の暮るる

午後からは日向となりて花八手

寒雀はんの近くに群れてをり

川涸れて鵝の歩く石の上

名を知らぬ立ち木を飾りクリスマス

知佳子

子と高き畝を作りて大根蒔く
 両端から子と大根の種を蒔く
 川の傍姉妹で柿を蒔ぎにけり
 竹竿で柿を上手に夫が蒔ぐ
 故郷で蒔ぎし甘柿母の食ぶ
 菊日和母と演歌を歌ひをり
 一本のシヤベルで芋を掘る姉弟
 女の子里芋の葉を差してをり
 母が屋の小流れに芋水車かな
 七五三の上げの仕方を母に聞く

ちどり

朝の月五感を覚ます深呼吸
 朝の窓開けて木犀香りけり
 橋渡る秋の日傘を見てゐたり
 秋風や魚掴みたる鳶の足
 葦咲くや助走の長き鶴の羽音
 銀木犀城の石垣あたたかし
 萩紅し躰口より入りけり
 秋祭り紙垂巡らせる町屋かな
 桜紅葉挟まれてゐし句集かな
 茶の花や日暮愁るる心持ち

辻純江

秋の野へ浅黄斑に逢ひにゆく
 坂道を通れば萩が肩撫づる
 草叢につんと突き出て吾亦紅
 山一面柿柿柿のおちらと村
 どの家も柿簾しておちらと村
 鴉鳴き家をぐるりと柿簾
 背伸びして紙垂を飾れる秋祭
 近づける女神輿を担ぐ声
 足元の花びら拾ふ秋明菊
 鴨の来し川辺にじつと立ちゐたる

雲雀

千羽浮く湖白鳥は一人

初雪やエレベーターに会話して

ドアマンの胸のキリリと息白し

冬の朝廊下とスリッパの隙間

ハチミツの並ぶ商店冬の町

山道のない雪を行く夫婦かな

屋根滑り落ちて潰れて割れて雪

濡れた靴異国の泥が雪に飛ぶ

通つたとバシてどうにも雪の跡

思うより張り詰め固き雪一面

ふじ女

野分かな笹原の道歩きをり

大鯉の上に大鯉秋の昼

影長く引いて二人の秋の夕

チャペルより童謡聞こえ秋の夜

本を伏せ無月の窓をまた見上ぐ

源流は一筋の水薄紅葉

水底に木舟の沈み水の秋

読み耽る古書へと釣瓶落しかな

夕食は秋刀魚と決めて目覚めたる

晩秋の夕べの雲の行方追ふ

松田裕子

稲架掛けのホイトハイとに暮れなづむ

掛稲は夫婦一年食ぶるだけ

新藁を干せば社に匂ひ立つ

日に曝し月に干したる甘藷かな

重ねたる回忌や瀬戸の小春風

小春かな霧雨に日の差してをり

焼鳥の煙に路地が生き返る

熱燗に曇る眼鏡を置いて呑む

煮凝りや明日の帰りを向はれをり

寒紅の姉美しき棺かな

森口良樹

葡萄棚手入れしてゐる老夫婦

梅檀は実ばかりとなり潜りけり

黄落や旅人に道問はれをり

冬の夕港に船の戻りくる

経堂は公孫樹落葉の中にあり

つかの間の日向のありて石路の花

吹き溜る落葉を蹴つて下校の子

木の葉降る旅人の背を見てをりぬ

念入りに落葉を選び見舞とす

眼の前を過り水面へ一葉落つ

ご自由にどうぞと書かれ棄の実

大豆干す丹後平野や落暉燃ゆ

野紺菊小道を西行庵へゆく

手を繋ぎ歩く二人へ星月夜

待ち兼ねし日本晴なり種を播る

猪垣を谷風抜くる夕間暮れ

山里は釣瓶落しや鐘の鳴り

青空の千切れ雲見て秋惜しむ

青北風や牧草ロール其処彼処

鈴生りに実る柿の実過疎の村

柿照るや土蔵の傍の日溜りに

青空や公孫樹紅葉の千畳閣

外国の言葉飛び交ふ紅葉狩

薄曇りふはりふはりと雪螢

手仕事の母の背中を着ぶくれて

桑門わかこ

山野ウタ

大原良子

秋風に飛行機雲は竜となる

よどみなく輪唱終へて秋日和

空高し時刻通りにバスの来る

陳列の和菓子に添ふる薄紅葉

やや寒の見知らぬ街に人を待つ

我が膝に我が笄揺る秋の昼

高梨英子

初冬の残れる月を見てをりぬ

乱れなき簾のリズム神の留守

髪置の子の神妙に祝詞聞き

来た道を戻れば紅葉さらに散る

川上の山の烟りて初時雨

夜のうちに少し濡れたる落葉かな

撫子

稽田のつづく川辺を散歩しぬ

玄関に裂けし石榴を二つ置く

またしても桜紅葉の散り敷きぬ

報恩講仏具磨きに山寺へ

寺近く住んで手伝ふ報恩講

紀英子

アイロンをかけてゐる窓枠すだれ

葛の葉の散れるや葛の葉の上に

老犬とゆつくり杜の落葉踏む

声のよき鳥渡り来し大樹かな

家並は石州瓦冬紅葉

熊谷ゆり子

コスモスの揃ひて風の吹くままに

山萩の勢ひ余り揺りけり

静かなり主なき庭に彼岸花

工場の煙の立たず秋澄めり

ちやんちやんこ友が作りて温きかな

須美れい

蜜柑山子どもは手と手繋ぎたり

水鳥や夕日きらめく川に来て

昼過ぎて亥の子の声の聞こえる

行き過ぎて戻りて見たる帰り花

上島康子

丁寧に剥かれ祭の栗おこわ

赤き実を食ひ尽したり鶉の来て

掃き集め最後の桜落葉かな

町内の会議の終り夜寒かな

高嶋彌代

ひらひらと草書のごとく秋の蝶

秋惜しむ母の遺せし着物解き

術前の医師の説明冬の風

軒下にぼとりと霏霜解けて

友岡紫山子

かさこそと落景踏みゆく散歩かな

堀越しに山茶花二輪咲きにけり

寒き朝靴下二枚重ねたり

金川昭子

立ち止まりコスモス畑しばし見る

柿の葉の舞ひ落つるさま見上げをり

寒風に時計見ながらバスを待つ

河原静子

背を丸め悴める手を両頬へ

街歩く悴める手を握り合ひ

薄雲にまぎれて冬の朝の月

民

蕎麦食べて孫と二人の新酒かな

稽田に風のそよぎて小猫居て

夕餉まで刈田に遊ぶ近所の子

みさ子

藪柑子赤き実一つ見つけたり

冬の月側に輝く星のあり

侘助を近くにお茶の稽古かな

美耶

ふるさとのラムネ湯に入る秋の夕

茹でたての落花生噛む昼さがり

雨降つて一気に冬の始まりぬ

やす保

晩秋やボートの浮かぶ桂川

公園の落葉を照らす夕日かな

山崎桂子

令和五年十月度作品集より

知佳子 私の選んだ十句

干し物をする人見ゆる稲の秋	佐保光俊
指で輪をつくりて覗く今日の月	村上正人
秋の雨しばらく頬を濡らしけり	高尾ひとみ
立待の一番星を見上げたる	亜矢
申し分なき桃そつと爪立つる	綾乃
脇道は小川に沿うて野菊晴	暁子
菊の香の柩に皆で蓋をせり	すみれ
酔芙蓉明日咲く花の揃いたり	辻純江
今日の月遠く居る子も見てをるか	雲雀
なりたての母親たちの居る良夜	松田裕子

森口良樹 私の選んだ十句

この川を渡れば吉備や秋日濃く	佐保光俊
退院の庭を綿虫漂へり	村上正人
我が肩にふれて木の葉の降りしきる	あざみ
静けさの増したる午後の花木僅	井藤希
往還は峠を下り稲の秋	暁子
吾亦紅口笛吹いて歩きけり	辻純江
我が影を踏みゆく釣瓶落しかな	山野ウタ
お揃ひの甚平を着て肩車	須美れい
渡り鳥一斉に来る朝の川	撫子
晴天も降つてもよろし初紅葉	熊谷ゆり子